特集 宇都宮氏と二荒山神社

「下野国一之宮」二荒山神社と「文武に優れた」宇都宮氏

名族宇都宮氏二十二代 500年の盛衰

「宇都宮」の地名の由来となった、宇都宮二荒山神社。そして平安後期から神社の社務職となり、豊臣秀吉に滅ばされるまで下野国を領地としていた宇都宮氏。歴史をたどれば、どちらも現在の宇都宮市の成り立ちに大きな影響を与えていることが分かります。波瀾万丈の歴史の旅を、誌面でどうぞお楽しみください。

宇都宮氏の居館があった「宇都宮城址公園」

源義家に随行した初代・宗円

皆さん、「宇都宮氏」をご存知ですか？いま、私たちが住む宇都宮市の「宇都宮」は、現在の宇都宮「二荒山神社の別号であった「宇津宮大明神」に由来します。

二荒山神社の主祭神は豊城入彦命で、『古事記』や『日本書紀』をひもとくと東国平定を行った皇族として描かれています。そのため創建より戦勝祈願の神社として多くの武将が参拝に訪れました。

それらの武将の中でも特に名高いのが、天喜5（1057）年に参拝した源頼義・義家親子でしょう。前九年の役の際、東北で起こった安倍氏の反乱を鎮定に行く途中で、二荒山神社で戦勝祈願を行いました。

この時に随行していた僧侶・藤原宗円は、氏家（現・さくら市）の勝山で調伏祈祷を行いました。その後、乱が平定されると「調伏の効果があった」として、二荒山神社の社務職に任ぜられました。同時に下野国の守護職として、この一帯を治めることになりました

宗円の出自は、摂関家で名高い藤原氏の流れをくみ、父は藤原兼房といわれています。二荒山神社の真南にあたる現在の宇都宮城址公園あたりに居館を構え、これが宇都宮城のはじまりとなりました。

宇都宮氏隆盛の基礎を作った朝綱

宇都宮氏を名乗るようになったのは、第3代目の朝綱からです。朝綱は平安時代末期、平氏が天下を手中に収めたころ、上北面の武士として上皇に仕えていました。そして治承4（1180）年、源頼朝が東国で平氏打倒の挙兵に踏み切ると、頼朝の元に駆けつけて、以後はその下で戦うようになります。

平氏滅亡から鎌倉幕府樹立と、武家政権の確立に大きな功績を残し、力のある御家人となった朝綱。頼朝の幕府開設に伴い、朝綱も鎌倉に居宅を構えました。宇都宮氏の館があったことから、その地は「宇都宮辻子」（辻子は「通り」の意味）と呼ばれるようになりました。後に、幕府の政府がこの場所に移転し、約12年間ここで政務が行われました。これを「宇都宮辻子幕府」と呼びます。

古代から宇都宮の産土神として崇敬されてきた二荒山神社

宇都宮歌壇の基礎を築いた第5代頼綱の供養塔（清巌寺）

晩年、子の業綱に先立たれたり、国司から公田横領の罪で訴えられ土佐に流されたりと、不幸の重なった朝綱ですが、家督を孫の頼綱に譲り、出家して一生を終えました。

歌人としても名高い頼綱

宇都宮氏の家系は優れた人材が多く、特に鎌倉から室町時代初期にかけては枚挙に暇がありません、同時に文化の面でも、東国の地にさまざまな影響を与えました。

第5代頼綱は北条時政の娘を夫人とし、北条氏との結びつきも強い御家人でしたが、謀反の疑いをかけられたため、それを晴らそうと家督を子の頼業に譲り出家、蓮生と名乗りました。

出家した頼綱（蓮生）は京都に居宅を構え、当代切っての大歌人・藤原定家と親交を結びました。頼綱は定家に和歌を学び、また定家の子に自分の娘を嫁がせています。この交流の中から生まれたのが、当初は頼綱の山荘を飾る目的で選んだといわれる「小倉百人一首」です。

頼綱自身、優れた歌人であり、宇都宮一族が中心となった「宇都宮歌壇」は、京都歌壇、鎌倉歌壇と並び「日本三大歌壇」のひとつとまで言われるようになりました。当時編纂された新式和歌集には、頼綱の歌が多数集められています。

頼綱の墓は京都の三鈷寺にありますが、宇都宮市清巌寺には供養塔が建立されています。

宇都宮氏の家紋「左三ツ巴」

宇都宮氏の略系図

1 宗円
2 宗綱
3 朝綱
4 業綱
5 頼綱（蓮生）
6 泰綱（頼業）
7 景綱
8 貞綱
9 公綱
10 氏綱
11 基綱
12 満綱
13 持綱
14 等綱
15 明綱
16 正綱
17 成綱
18 忠綱
19 興綱
20 尚綱
21 広綱
22 国綱

元寇で活躍した貞綱 秀吉に滅ぼされた国綱

鎌倉時代後期の第8代貞綱は、元寇の際に二度に渡り九州筑前に出陣しています。また第9代公綱は、鎌倉末期に北条高時の命で楠木正成と戦いましたが、『太平記』によれば正成は公綱の布陣を見て「宇都宮は坂東一の弓取也」と感嘆し、闘わずして退散したとあります。

このように、文武ともに名高い宇都宮氏でしたが、時代はやがて戦国時代となります。第17代成綱は宇都宮氏の戦国大名化を図り、北関東最大の勢力にまで成長させ、最盛期を迎えました。

時は下ります。第22代国綱は、豊臣秀吉の小田原北条氏攻めに戦功があり、「羽柴侍従」の称号を許され、本領も安堵されました。しかし、ようやくその地位を確立したと思った矢先、慶長2（1597）年、突然秀吉により「不慮の小細」があったと改易が申しわたされます。そのため宇都宮氏一門の所領はすべて没収され、慈心院・東勝寺・粉河寺などゆかりの寺院もすべて廃寺。国綱は娘婿の備前・宇喜多秀家預かりとなり、ここに名門宇都宮氏は滅亡しました。

宇都宮市内の興禅寺に貞綱・公綱の墓と伝えられる供養塔があり、また清巌寺には、頼綱の供養塔が建っています。同じく清巌寺には、わが国最古の巨大な鉄塔婆（国指定重要文化財）がありますが、これは第8代貞綱が亡母の十三回忌供養として、東勝寺に建立したものです。

参考文献：『うつのみやの歴史』（宇都宮市編・発行）

清巌寺にあるわが国最古の鉄塔婆
塙 静夫『うつのみや歴史探訪』（随想舎）より

右は第8代貞綱、左は第9代公綱の墓と伝えられる供養塔（興禅寺）

四季折々に美しい風情を見せる二荒山神社。桜の美しさも定評があります

宇都宮二荒山神社の成り立ちと、宇都宮氏との関わり

宇都宮二荒山神社宮司 助川通豢さんに聞く

宇都宮市のシンボルであり、古代から現在まで格式高い社として崇敬されて来た、宇都宮二荒山神社。その成り立ちやお祀りしている神様、「宇都宮」の地名の由来、そして宇都宮氏との関わりなどを、助川通豢宮司にうかがいました。

主祭神「豊城入彦命」は天皇の直系

――神社の主祭神、豊城入彦命とはどのような神様ですか？

助川　私ども宇都宮二荒山神社の主祭神、豊城入彦命のお名前は、『古事記』『日本書紀』などに登場します。この方は崇神天皇の皇子でしたが、全国統治の御代、東国鎮撫の勅命を受けてこの地へご差遣され、弟君・活目命が11代垂仁天皇に即位されるという皇室直系の方を、祭神として祀っています。御祭神「豊城入彦命」は『日本書紀』の祭神名で、『古事記』には豊富な木々の中に入られた神「豊木入日子命」と表記されています。

――古代から格式高い神社だったとうかがっています。

助川　「二荒」の名前は、平安時代の歴史書『続日本後紀』に「二荒神」と記載されたのが初見で、「二荒神社」という名称は同時代の『日本三代実録』に登場します。その後も繰り返し、さまざまな文書に登場しますが、それに従って勲位も、従二位から正二位、従二位と、昇叙されていきます。

「宇都宮」の名前の由来は？

助川　延長5（927）年に『延喜式』という、全国の神社の格式を記載した文書ができ、その神名帳に2、800社からの神社が掲載されています。私どもについては東山道「河内郡一座　大二荒山神社名神大」と書かれています。「名神」というのは「名神大社」のことで、大社の中でも特に選ばれた神社です。全国に約300社あり、下野国では二荒山神社だけです。これも、格式の高さを示すものだと思います。

奈良時代に仏教が入って来ますと、日本の神様を仏教の仏様と関連づける「神仏習合」が起こります。神社であっても仏事を行う信仰が生じ、神社に付属して寺院が設けられるようになります。これを「神宮寺」といい、神宮寺の発祥を見ますと、福井県の気比神宮、大分県の宇佐神宮、三重県の多度大社と伊勢神宮、その次に私ども二荒山神社の神宮寺である「慈心院」が列してきます。

その地方ごとに、もっとも格式の高い神社を「一之宮」と言います。「一之宮」の称号は『今昔物語』に記されたのが初見で、「国中第一鎮守」「国中第一之霊神」とされました。文献を調べてみますと、畿内（中央）から陸奥（東北）へ向う「東山道」の沿道にある「一之宮」は、「近江　建部大社」「美濃　南宮大社」「飛騨　水無神社」「信濃　諏訪大社」「上野　貫前神社」そして「下野　二荒山神社」と、そうそうたる名社が並んでいます。

――神社は、もともとは現在の下之宮の場所にあったそうですね。

助川　そうです。承知5（838）年に、現在の場所に遷座し、それまであった発祥の地を「下之宮」としたのです。神様を移した「移しの宮」であるということから、これも「宇都宮」という地名の由来に挙げられています。

――「宇都宮」という名前の由来は諸説ありますね。「一之宮」から来ているとも言われます。

助川　「一之宮」「移しの宮」の他にも、「稜威の宮」（大変神聖で神徳の高い神様、という意味）、「現の宮」（現存の神様＝天皇陛下のご子孫をお祀りしている神社という意味）、「臼が峰」（神社のある地名）、「征討の宮」（武将が戦勝祈願をしたことから、敵を討つ霊験あらたかな神社という意味）、「宇豆高き御屋代」（供物などをうずたかく盛る社という意味）、「埋もれの木」（主祭神のお名前が『古事記』では「豊木入日子命」豊かな木の中にお入りになられた、と表記してあることから）説などさまざまな由来が言い伝えられています。

そして、初代・宗円が石山寺座主より城主となり、第2代宗綱、第3代朝綱と平安京の貴族文化にふれ、公家との交流を深め、朝綱は醍醐局を迎え歌道にも優れ、都で文化人として、下野国では宇都宮様として崇敬され、宇都宮姓の素地ができてきたのではないかと思います。

私家法「弘安式条」にも神事の定めが――

――宇都宮城主は、初代の宗円が社務職として、城主であると同時に神官でもあったそうですね。それが代々受け継がれていったのですか。

助川　そうです。宇都宮氏は第22代国綱にいたる約500年の間、城主であるとともに神官としての務めを受け継いでいました。ですからさまざまな史料なども神社に残っていましたし、何より神社の神事や伝統も、今に継承されてきたのだと考えられます。

――例えば、どのような形でつながりがあったのでしょうか。

助川　宇都宮氏の私家法「弘安式条」に、神事について事細かく定めています。

宇都宮氏は弘安6（1283）年に、第7代景綱が、幕府の「御成敗式目」を元に、私家法である「弘安式条」（「宇都宮家式条」「宇都宮家弘安式条」とも呼ばれています）を定めました。これは全70カ条からなるもので、比較的整った武家の家法としては、日本最古のもので御法度集です。

大通りを通る人々からも親しまれている大鳥居

写真 上／三十八間星兜：南北朝の頃の作とされる兜。藤原秀郷が奉納したという伝説もあります
写真 下／鉄製狛犬：鎌倉時代の作で、火災にあって左前足が失われています

この内容ですが、大きな特徴は二荒山神社についての記述があり、「神社のご祭礼がある時には、例え鎌倉や京都に居ても、必ず戻って来なさい」とあります。どこにいても、神事には必ず奉仕しなさい、とはっきり定めてあります。

二荒山神社は室町時代まで、20年に一度、建て替えられていました（式年造営）が、それもこの弘安式条に定められています。神社の建物の補修も守るべき事とされています。

それから、神社の行事としては、児延年舞や流鏑馬などについての記載があります。神事について事細かく定めた条文が、私家法にあるのは珍しいことです。これも宇都宮氏が社務職であったからです。

この長い石段は95段あります。
一気に駆け上がれる人は、元気な証拠

「新式和歌集」など貴重な収蔵品も――

――お話をうかがっていますと、改めて二荒山神社と宇都宮氏との関わりの深さを実感します。

助川　現在、社務所に展示してある宝物に『新式和歌集』があります。これは第5代頼綱と外戚関係にあった歌人・藤原定家の孫、為氏が編纂したといわれ、宇都宮一族の詠んだ歌が多数収められている和歌集です。その他に鎌倉幕府三代将軍の源実朝の歌や、藤原定家の歌など、京都や鎌倉の歌人の歌が広く収められており、当時の宇都宮氏の文化的交流の広さ、深さを示すものとなっています。

それから、国指定の重要美術品として「三十八間星兜」と「鉄製狛犬」があります。前者は南北朝期のものと考えられています。また後者は「建治三年二月 吉田直連施入」の銘があり、1277年（鎌倉時代）の作と思われます。

他にもさまざまな宝物、史料などがあり、それを大切に保管して次代へ引き継ぐ事も、私どもの大切な役割だと考えています。

――江戸時代以降の宇都宮と二荒山神社についても、機会がありましたらまたお話をうかがわせてください。ありがとうございました。

宇都宮氏の文化交流の広さを表す『新式和歌集』

宇都宮二荒山神社 宮司 助川通豢さん

宇都宮二荒山神社　宇都宮市馬場通り1丁目1番1号　☎622-5271（代）

写真：宇都宮二荒山神社提供

宇都宮二荒山神社と宇都宮氏ゆかりの場所を訪ねる

市内「ゆかりの地」探訪MAP

宇都宮氏は二十二代、約500年にわたり宇都宮城の城主として、また二荒山神社の社務職として、下野国を治めてきました。ですが、菩提寺であった東勝寺が宇都宮氏改易に伴って廃寺されるなどして、現在まで伝えられる旧蹟は残念ながらさほど多くありません。第22代国綱の改易後、子孫は代々水戸藩に仕えて、明治維新を迎えています。今回の特集「宇都宮二荒山神社」「宇都宮氏」の記事に登場したゆかりのスポットを、地図と写真でご紹介します。

宇都宮二荒山神社

臼が峰にある宇都宮のシンボル、二荒山神社。境内には本殿・拝殿の他に神楽殿、神門などがあります。

興禅寺

正和3(1314)年に宇都宮貞綱が開基したと伝えられる興禅寺には、貞綱と子・公綱の墓と伝えられる供養塔があります。江戸時代の「浄瑠璃坂の仇討」の発端となった事件が起ったことでも有名です。

写真:塙 静夫「うつのみや歴史探訪」(随想舎)より

下之宮

かつて、二荒山神社は「荒尾崎」という場所に祀られていました。それが、現在の下之宮あたりだと考えられています。その後、承知5(838)年に現在の臼が峰に遷座、こちらを摂社としました。

清厳寺

宇都宮頼綱(蓮生)ゆかりの寺である清厳寺には、その頼綱の供養塔があります。またわが国最古の鉄塔婆も境内の収蔵庫に見ることができます。この鉄塔婆は貞綱が亡母供養のため建てたもので、もとは東勝寺にあったものです。

写真:塙 静夫「うつのみや歴史探訪」(随想舎)より

宇都宮城址公園

明治維新の戦火で焼失した宇都宮城の一部を復元し、平成19年にオープンした公園です。敷地内には、歴史史料を展示している清明館などがあります。

特別ルポ

鎌倉の宇都宮を探しに行きました!

「宇都宮辻子幕府」跡を訪ねて

「鎌倉に宇都宮があるそうです」という情報をつかんだ、会報『天地人』編集委員。「宇都宮辻子という場所があるそうです」。「宇都宮稲荷大明神が信仰を集めていると聞きました」。これは早速取材しなければ! と取材チームを編成、鎌倉に急行しました。

厳かな雰囲気の社です!

JR宇都宮駅から湘南新宿ラインに乗って約2時間半、意外に近い鎌倉です。あいにくの曇り空で、天気予報は「雨」。出発前はのんびり観光気分だった取材チームですが、これはいけないとばかり、キリッと仕事モードに切り替わりました。

鎌倉市小町2丁目15にある宇都宮稲荷大明神

鎌倉駅から若宮大路に出て、大きな鳥居を横目に見ながら道路を横断。さすがは鎌倉、平日にも関わらず道路は大混雑です。

鶴岡八幡宮に向ってしばらく歩くと、右手に「鎌倉彫資料館」と「カトリック雪ノ下教会」が見えました。ここの二つの建物の間の小路を入って行くと……

ありました!

「宇都宮稲荷大明神」と染め抜かれた、目に鮮やかな赤いのぼりが何本も立っています。そして、それを囲むような鮮やかな緑。入口には鳥居が立ち、社周辺もきちんと掃き清められて、大切に手入れされていることが見て取れます。後で聞くと、地元の皆様がお世話をしてくださっているとのこと。ありがとうございます。

宇都宮稲荷大明神
【周辺地図】

宇都宮稲荷神社
神奈川県鎌倉市小町2丁目15
鎌倉駅から徒歩10分
(カトリック雪ノ下教会と鎌倉彫資料館の間の道を入り右側)

鳥居の手前に立つ石碑には「宇津宮辻幕府旧蹟」と題した由来が刻まれていました。大正10年に、鎌倉町青年会により建立されました。

鎌倉幕府の有力御家人であった宇都宮氏(当時は3代朝綱)が、幕府開設の折、この地に屋敷を構えたことから「宇都宮辻子」(辻子とは小路の意味)と呼ばれました。嘉禄元(1225)年から約12年間、幕府政庁が置かれたことに由来し、この時期の幕府を、その地名をとって「宇都宮辻子幕府」と言い習わしています。

ここに現在、なぜ稲荷大明神が祀られているのかは定かではありません。宇都宮氏はもともと稲荷信仰が篤く、屋敷内には必ず稲荷神社が祀られていたことに関係があるのでしょうか。

由来を刻んだ石碑

若宮大路と平行に東西に通っていた宇都宮辻子。現在は閑静な住宅地になっています。多くの観光客が押し掛けるような場所ではないため、落ち着いた雰囲気の中でお参りすることができました。

取材チームは「これをご縁に、当地との交流をしたいものですね」と口々に話しながら、崩れそうな空を心配しつつ、鶴岡八幡宮への参詣へ向いました。

平日でも観光客でにぎわう鶴岡八幡宮